

令和 3 年 5 月 11 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K17399

研究課題名（和文）講義から臨地実習への橋渡しを可能にする新しい授業評価尺度の開発

研究課題名（英文）Development of new psychiatric and mental health nursing education strategy connecting with lectures and practicums

研究代表者

大達 亮 (Odachi, Ryo)

大阪大学・医学系研究科・助教

研究者番号：10760796

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、精神看護学の講義と実習がより効果的に連結されるための方略を探るために行われた。このために看護大学生に対して精神看護学を中心とした学習経験についてのインタビュー調査を行った。このインタビューデータの分析の結果、精神看護学の学習経験は、精神看護学の知識と学生個人の生活経験が接続されることでポジティブな学習成果が前景化する可能性が示唆された。加えてコミュニケーション以外の学習成果に対する認識の有無によってもポジティブな学習経験として実習を捉えやすくなることも考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまで研究の蓄積がされてこなかった精神看護学における知識と実践の乖離（theory and practice gap）に着目した。本研究から導かれる精神看護学の授業方略としては、学生の個人的な生活経験を喚起させ、この経験と精神看護学における知識をファシリテーションによって接続させることが挙がる。精神看護技術は文脈に依存する部分が大きく、その技術の有り様も個人によって異なる。これまでは技術をどう患者に実施するかという点に看護教育は重点が置かれていたが、本研究によって技術を実施する自分自身という観点も十分に考慮する必要性が示されたと考える。

研究成果の概要（英文）：This study was conducted to explore strategies for more effective linkage between lectures and practicums psychiatric and mental health nursing (PMHN). For this purpose, the interviews on learning experience, mainly in the psychiatric nursing practicums, was conducted for the nursing students. As a result of the analysis of the interview data, it was indicated that positive learning outcomes might be foretold by connecting the knowledge of the PMHN and the life experience of individual students. In addition, it was also considered that the practicums were easy to catch as a positive learning experience by the existence of the recognition for learning outcomes except for the communication.

研究分野：看護学

キーワード：看護教育 精神看護 theory and practice gap 授業デザイン

1. 研究開始当初の背景

日本の大学における看護師教育の目標は、看護の実践者、研究者、教育者の育成である。それぞれの目標の基礎となるのは、専門職としての看護師の養成である(齊藤, 2018)。特に学部修了生の進路の80%以上は臨床の看護師であり(厚生労働省, 2019)、現状として日本の大学における看護教育は看護師の養成の機能が大きいと言える。看護師の養成という目標達成のために、臨床実習は実際の患者を対象とした看護技術と看護展開の学習経験の場として重要である。この臨床実習の基礎となっているのが学内での講義や演習であり、この「講義から実習へ」というプロセスを持つ科目が中心となりカリキュラムに組み込まれている。このため臨床実習は講義と演習のアウトカムという側面を持ち、授業者はこのアウトカムを意識しながら講義や演習をデザインする必要がある。また、授業者が伝える内容と臨床実習とを学習者の現実世界の経験を媒介として結びつける「橋渡し方略」(Clement, 1987)が必要である。

しかし講義で伝えられた知識と実習における実践の間には不一致が起こることが theory-practice gap として報告されている(Benner et al, 2010; Hislop et al, 1996; Meyer & Xu, 2005; Norman et al, 2005)。Theory-practice gap 研究には看護学校から大学へと教育の転換により、学生に対する豊かな知識の習得がされ始めたことが背景にあるが、これらの研究によって主張されたのはむしろ臨床の実践をどのように伝えるかという点においての講義や実習の改善方策(Hislop et al., 1996)であった。臨床実践を重視するにあたっては、徒弟制的な教育が求められるため批判も存在する。例えば本田は職業に関する教育においては、学習者が実社会に「適応」する手段を身につける必要があると同時に、実社会へ「抵抗」する手段を学ぶ機会でもあるとする(本田, 2009)。看護教育においては学術的な専門知識と臨床における実践技術はどちらも不可欠であり、どのようなバランスでこの二つの主題を教育の中に配置するかということについては検討を続ける必要がある。しかし、日本における theory-practice gap に関する研究は、基礎看護学を対象とした香川らのいくつかの研究に限られる(香川, 2012; 香川 & 茂呂, 2006)。

また精神看護における theory-practice gap や講義と実習のつながりは他の領域に比べ以下のような点で独特であることが推察される。精神看護学において中心的な技術となるのは、コミュニケーションに関するものである(Cutcliffe & McKenna, 2006)。コミュニケーションに関する技術は状況依存的であるためバリエーションも豊富で、抽象的でもある。コミュニケーション技術について、知識や実践を伝えることは独特の困難さがあることをいくつかの報告は示す。例えば、講義においては実践方法よりも考え方に重点を置くため実践との差が生じること、学生もコミュニケーション技術について適切に用いることに自信が持てないことが報告されている(Demir & Ercan, 2018; Hartrick, 1997)。また精神看護技術については可視化や測定ができない側面をもち(Cutcliffe & McKenna, 2006)、精神疾患についても検査値や画像診断技術などで診断できない部分も多く存在するため、このような点は学生にとっても理解を困難にする。

加えて学生にとってのもう一つの大きな問題がスティグマである。精神疾患に対しては今なおスティグマが存在し、精神疾患をもつ人やその接し方について不安や恐怖を感じやすいことが報告されている(Stuart, 2016)。看護学生もその例外ではなく、実習前は一般の人々と同様のスティグマを抱えていることが報告された(Demir & Ercan, 2018; Doolen et al, 2014)。このことから精神看護学実習前の看護学生は患者に対してスティグマに由来する不安や恐怖を抱えた緊張状態にあることが推測された。

以上のような特殊性をもつ精神看護学の学習経験について研究の蓄積がされておらず、この経験が記述されることにより、講義から実習へという「橋渡し方略」が検討可能になると考えた。

2. 研究の目的

本研究においては看護大学生の精神看護学における講義と実習とのつながりと乖離、それぞれの学習経験を看護大学生自身の語りから明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1)研究デザイン:本研究は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)(木下, 2007)を用いて行った。M-GTAは継続比較やグラウンデッド・データなどのGlaserとStraus(1966)のGTAの手法を継承しながら、研究参加者の視点を理解するためにデータの切片化を行わず文脈を保ちながら分析を行うという特徴をもつ。本研究の分析対象となった看護大学生の学習経験は知識の獲得を経て、実践に移すというプロセスであり、M-GTAはプロセス性のある現象に適しているとされたため方法として採用した。

(2)対象者とデータ収集:本研究は地方国立大学の看護大学生を研究参加者としたインタビュー調査を行った。主な研究参加者は直近で精神看護学実習を経験した大学3年生であったが、実習前後の経験についても調査するために2年生、4年生も研究参加者に含めた。インタビューは1対1の個別インタビューと研究者1名に対し研究参加者2名のジョイントインタビュー(Allan, 1980; Racher, 2003)を併用した。ジョイントインタビューを併用した理由としては、学生同士が実習の経験を共有しており、研究参加者同士の相互作用によりインタビューが活性化するこ

とを期待したことが挙がる。一方で個別インタビューを研究参加者が希望した場合はその希望に沿った。調査はインタビューガイドを用いて、精神看護学の講義や実習、両者のつながりや乖離について尋ねる一方で、他の実習の経験や学外での経験についても追加の質問で尋ねた。インタビューは2017年10月から2018年3月に行った。

(3) データ分析：M-GTAの最小分析単位は概念と呼ばれる。概念は分析テーマによって抽出された生データをコーディングすることで生成される。概念同士を対極性や類似性で行った視点から比較することにより概念の修正や統廃合を繰り返し、その過程で抽象度の高いカテゴリーが生成される。カテゴリーにおいても同様に比較を繰り返すことによって、より現象を適切に説明するカテゴリーの生成を目指した。分析の最後にカテゴリーの関係性を表す結果図とストーリーラインを作成した。コーディングについては、研究代表者がひとりで行ったが、学生や実習指導にあたる看護師などを含めた分析セッションを複数回行い、コーディングの妥当性について検討を繰り返した。

4. 研究成果

(1) 21名の看護大学生に対して、12回のインタビューを行い、うち3回が個別インタビューであった。研究参加者は看護大学2年生2名、3年生14名、4年生3名であった。インタビューの平均時間は66分(44-111分)であった。

(2) ストーリーライン：看護大学生の精神看護学への学習経験プロセスは、講義においては学生自身の“生活体験にもとづいた学習態度形成”によって、肯定的かつ積極的な“自己発展的知識定着”もしくは受動的な“表面的な精神看護の知識獲得”に至っていた。また“精神看護の曖昧さとの出会い”によって、学生の受動的な学習が促されて、学習成果の二極化が進みやすい傾向がみられた。実習において、まず“実習開始に伴う動揺”が生じていたが“実習資源による部分適応”によって学生の緊張状態は解消されていた。学生は大小の差はあるが“コミュニケーションの見直し要請”を一時的に抱えることによって“コミュニケーションの再定義”することで実習の成果を得ていた。しかしこれ以外の成果は、講義による学習成果に大きく影響していた。講義によって受動的な学習成果をえた学生は“精神疾患をもつ人への知識の混乱”や“精神看護実技技能への理解困難”を生じ、“実習意義の未発見”が学習経験として前景化しやすく、一方の学生は実習においても積極的かつ肯定的な“発展的自己学習”が前面に出る学習経験として意味づけられやすくなっていた。

(3) 本研究結果は現在BMC Nursing(<https://www.researchsquare.com/article/rs-318143/v1>)に投稿中である。本研究から導かれる精神看護学の授業方略としては、学生の個人的な生活経験を喚起させ、この経験と精神看護学における知識をファシリテーションによって接続させることが挙がる。精神看護技術は文脈に依存する部分が大きく、その技術の有り様も個人によって異なる。これまでは技術をどう患者に実施するかという点に看護教育は重点が置かれていたが、本研究によって技術を実施する自分自身という観点も十分に考慮する必要性が示されたと考える。このような精神看護学に内包される不確かさについては、個人として応じるだけでなく、教員や臨床の指導者、研究者、学生のそれぞれが表現し、共有できる仕組み作りをしていくことで、教育の多様性の醸成、教育にかかるコストの問題の解消につながる可能性がある。

<引用文献>

- 斉藤しのぶ.(2018). 看護学士課程における教育の現状と課題. 日本薬理学雑誌, 151, 186-190.
- 厚生労働省.(2019). 看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査.
- Clement, J., & Brown, D. (1987). Overcoming students' misconceptions in physics: The role of anchoring intuitions and analogical validity. In Proceedings of the second international seminar on misconceptions and educational strategies in science and mathematics (Vol. 3, pp. 84-97). Ithaca, NY: Cornell University.
- Benner, P., Sutphen, M., Leonard, V., & Day, L. (2010). Educating Nurses: A Call for Radical Transformation. San Francisco, CA: John Wiley & Sons, Ltd.
- Hislop, S., Inglis, B., Cope, P., Stoddart, B., & McIntosh, C. (1996). Situating theory in practice: student views of theory-practice in Project 2000 nursing programmes. Journal of Advanced Nursing, 23(1), 171-177.
- Meyer, T., & Xu, Y. (2005). Academic and clinical dissonance in nursing education: are we guilty of failure to rescue? Nurse Educator, 30(2), 76-79.
- Norman, L., Buerhaus, P. I., Donelan, K., McCloskey, B., & Dittus, R. (2005). Nursing Students Assess Nursing Education. Journal of Professional Nursing, 21(3), 150-158.
- 本田由紀.(2009). 教育の職業的意義 若者、学校、社会をつなぐ. 東京: 筑摩書房.
- 香川秀太.(2012). 看護学生の越境と葛藤に伴う教科書の「第三の意味」の発達: 学内学習 臨地実習間の緊張関係への状況論的アプローチ. 教育心理学研究, 60, 167-185.
- 香川秀太, & 茂呂雄二.(2006). 看護学生の状況間移動に伴う「異なる時間の流れ」の経験と生成: 校内学習から院内実習への移動と学習過程の状況論的分析. 教育心理学研究, 54, 346-360.
- Cutcliffe, J. R., & McKenna, H. P. (2006). Generic nurses: the nemesis of

psychiatric/mental health nursing? In J. R. Cutcliffe & M. F. Ward (Eds.), *Key debates in psychiatric/mental health nursing* (pp. 92-106). Philadelphia, PA: Elsevier Ltd.

Demir, S., & Ercan, F. (2018). The first clinical practice experiences of psychiatric nursing students: A phenomenological study. *Nurse Education Today*, 61(October 2017), 146-152.

Hartrick, G. (1997). Relational capacity: The foundation for interpersonal nursing practice. *Journal of Advanced Nursing*, 26(3), 523-528.

Doolen, J., Giddings, M., Johnson, M., Nathan, G. G. de, & Badia, and L. O. (2014). An Evaluation of Mental Health Simulation with Standardized Patients. *International Journal of Nursing Education Scholarship*, 11(1), 55-62.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大達亮、山本真理子、玉木朋子、眞浦有希、伊藤美樹子、小西かおる
2. 発表標題 逸脱としての ” 良い ” 看護実践の検討：療養病床における終末期高齢者への看護実践のナラティブ分析から
3. 学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大達亮、矢田浩紀、山根俊恵
2. 発表標題 学士課程において精神障害者の地域支援への理解と関心を高めるための授業と実習の工夫
3. 学会等名 第24回日本精神科専門学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大達亮、矢田浩紀
2. 発表標題 精神看護学における学生の学習プロセスに関する研究：知識から実践のつながりと乖離の探索
3. 学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大達亮、榎本萌那
2. 発表標題 看護大学生の精神看護学実習におけるポジティブでない経験に関するインタビュー調査
3. 学会等名 第27回日本精神科看護専門学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------